事例4 文化祭

高校生らしい高みを生徒に求め、劇づくりの過程の中で教師も生徒と共に挑戦する

大分県立大分舞鶴高校

●大分県立大分舞鶴高校 文化祭 概要

大分県立大分舞鶴高校の文化祭は「柏葉（はくよう）祭 文化の部」として、例年2学期が始まる8月の最終週に、2日間にわたって開催される。文化祭の発表では、学校の教室での展示もあるが、メインは学校近くのホールを会場にしたステージ発表だ。ただし、ステージ発表が出来るのは、事前の書類による企画審査に通過したクラスのみ。1・2年生全16クラス中、7クラスしか舞台に立つことが出来ない狭き門である。そのため、1・2年生の各クラスにとって、書類審査を通過してステージに立ち、観覧者の投票による最優秀賞に輝くことは大きな名誉であり、目標だ。

田所伸（たどころしん）先生が担任を務め、工藤恵介さんが所属したクラスは、そのステージ発表でオリジナルの劇を発表し、1年生の時に2位、2年生の時には1位に輝いた。

生徒の自主性を尊重して進められる同校の文化祭では、田所先生のクラスも生徒が主体となって企画を練り上げ、夏休みの補習後の時間を使って練習を重ねていった。他クラスがミュージカルや音楽演奏などを発表する中、田所クラスは「自分たちが社会とかかわり、世界を変える」をコンセプトに、それまでにはない発想で創作に取り組み、そして、同校のステージ発表の歴史の中でも、特筆すべきユニークな劇をつくり上げた。

卒業生が語る

常に上を目指すクラスが社会とつながる新しい劇をつくる

宮崎公立大人文学部国際文化学科
2年生
工藤恵介（くどう・けいすけ）

高校生らしい感動を目指し劇づくりに取り組みました

ステージ発表の企画は各クラスで自由に考えます。ダンスやコントなど趣向を凝らした企画が出されますが、最優秀賞を取るには自分たちが楽しむだけではなく、見ている人に感動を与えることが必要です。

1年生の時に僕たちのクラスが企画したのは、「ピーター・パン」の劇でした。田所先生にその案を説明すると、先生から「ピーター・パンの物語をただ演じるだけでは、自己満足で終わってしまわないか?」「次代を担う高校生だからこそ与えられる感動はないだろうか?」と言われました。「ピーター・パンは、フック船長と戦ってネバーランドを救うんだよね。劇を演じる君たちは、その感動を物語の中だけで終わらせず、自分たちが生きる現実に結び付けることは出来ないかな?」と先生は僕らに尋ねました。

実は、僕らのクラスの生徒は、当時の大分舞鶴高校の中で「タドチル」と言われる存在でした。田所先生の考え方に感化された生徒だから「タドチル」です。田所先生は、生徒のやる気を引き出し、もっと上を目指したいという気持ちにさせてくれる先生で、田所先生が受け持つタドチルには、前向きな生徒がたくさんいたのです。だから、先生の問い掛けを受け止め、もう少しみんなで考えてみることにしました。

クラスで話し合う中で、理想を現実のものにする手段の1つとして、

途上国の子どもたちのために募金活動を行う案が浮上しました。すると、そのプランを知った田所先生が、「駅前のデパートの前で、みんなが募金活動を出来るように交渉しよう」と言ってくれたのです。そして、「世界を変えるという気持ちで募金を呼び掛けてみなさい」という田所先生の言葉に送り出されて、僕らはクラス全員で、大分で一番大きなデパートの前で募金活動をしました。

その体験は、ピーター・パンのシナリオに大きな影響を与えました。僕らは、集まった募金をユネスコの発展途上国の教育支援に寄付することを決め、ユネスコから世界の子どもたちの現状を紹介するパネルを借り、文化祭期間中に展示しました。そして、ピーター・パンの劇では、募金で集まったお金を1円硬貨に換えて、フック船長の船に飾り付けました。僕らタドチルは、自分たちの思いが劇中にとどまらず、行動となって少しだけ世界を変えたことを校内に示したのです。

大分県立大分舞鶴高校

◎校是に当たる舞鶴魂「締まれ、頑張れ、粘れ、押し切れ」というモットーを持つ。県下有数の進学校で、1年次より希望進路に応じた志望別クラス編成を実施。ラグビー部、カヌー部、バスケットボール部、テニス部など全国屈指の実績を誇る部活動も多い。スーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校。

◎ 1951（昭和26）年設立。全日制／普通科、理数科／共学。1学年約320人。2014年度入試では、国公立大は、一橋大、大阪大、神戸大、九州大、大分大などに224人が合格。私立大は、東京理科大、早稲田大、関西学院大などに延べ284人が合格（現役のみ）。

〒870-0938　大分県大分市今津留1-19-1

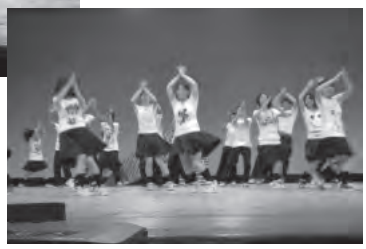
http://kou.oita-ed.jp/oitamaizuru/

社会を巻き込む力を持っていることに気付きました

外の世界を巻き込んだ作品をつくったことで、僕らは「高校生でもここまで出来るんだ」という感動を味わいました。それは、ステージ発表部門で2位という結果以上に、大きな成功体験になったと思います。

2年生の文化祭では、その年の春に発生した東日本大震災からの復興をテーマに劇をつくることが決まり、僕が主役と監督を務めました。高度成長期の日本の風景を描いた映画「ALWAYS　三丁目の夕日」をモチーフにすることはすぐに決まりましたが、感動を与えるには更に工夫が必要だと、クラスのみんなが考えていました。しかし、良い案はなかなか浮かびません。そんな僕らに

写真　田所クラス1年生のクラス発表「ピーター・パン」より



1年生の時の文化祭で、田所クラスは「ピーター・パン」の劇を制作した。子どものための募金活動を行うなど、社会とつながることを意識した劇づくりで、ステージ発表部門で2位に輝いた。

田所先生は「いろいろな人に、復興への思いを聞いてみたらどう?」とアドバイスしてくれました。そこで僕らは話し合い、企業や官庁、国際機関に手紙を出して、復興へのメッセージをもらうことにしました。

日本の未来への期待と、その実現のために必要なことについて、様々な人たちが答えてくれました。国連の公式フェイスブックで「日本の高校生からこんな質問が来た」と紹介された時は、全員が拍手して喜びました。たくさんの回答を劇のセリフに盛り込み、更に全てのコメントを劇のエンドロールで紹介しました。

納得できる達成感は受験への自信になりました

2年生の田所クラスの劇は、ステージ発表部門で1位になりました。もちろんうれしかったのですが、準備の段階から1位を取る予感がしていました。なぜなら、クラスの誰もがいつも劇のことを話題にしていて、劇づくりでクラスがまとまっていることを感じていたからです。

実は夏休み中、僕らが勉強にも劇づくりにも没頭できるようにと、田所先生がクラス全員で参加する宿泊合宿を企画してくれました。先生は自ら企画書を作り、学校と交渉してくれたのですが、残念ながら許可は下りませんでした。田所先生は、企画が実現できないことを教室で報告すると、僕らに向かって「申し訳ない」と深々と頭を下げたのです。もちろん、クラスの誰一人、田所先生を責めようとする人などいませんでしたが、先生が頭を下げる気持ちは分かる気がしました。先生も、より良い劇をつくりたいと願う、クラスの一員だったのだと思います。

2年生の劇づくりが終わった時、僕は今まで以上に田所クラスが好きになり、2学期からの授業が一層楽しくなりました。そして、志望大合格に向けて自分が何をやっていけばよいのか、必要なプロセスが見通せるようになっていました。それは、劇づくりで納得できるものをみんなでつくることが出来たという成功体験があったからだと思います。

教師が語る

高みを目指すことを生徒に求めながら、自らもその姿を生徒に示す

大分県立大分舞鶴高校
田所 伸 たどころ・しん
教職歴12年。同校に赴任して8年目。1学年主任。

失敗を笑わないクラスをつくろうとしました

1年生に対する指導で重視しているのは、もう中学生ではないことを自覚させ、大分舞鶴高校の生徒として、全てにおいて高いレベルを目指すように促すことです。それは文化祭のステージ発表でも同じことで、「もっと良いものが出来るはず」「もっと見ている人を感動させよう」と生徒に要求します。2年生になったら更に背伸びをさせ、失敗も経験させなければいけません。

劇づくりにおける高望みは、空想の中にとどまらず、高校生として現実の社会とつながることだと私は考えました。演劇部顔負けの上手な演技で観客の心に迫るのも良いけれど、クラス全員の出し物としてつくるのであれば、世界と自分のつながりを考え、今後の生き方に影響するような作品をつくってほしいと思ったのです。文化祭の劇づくりは、彼らの成長の機会なのですから。

しかし、最近の生徒は、高望みすることを苦手にしています。だから教師には、高望みし、アクションを起こした仲間に敬意を表する雰囲気をクラスの中につくることが求められます。高みを目指して失敗した仲間を笑うようなクラスをつくるわけにはいかないのです。

本校では1年生の4月の教育合宿で、クラス対抗の校歌斉唱コンテストがあります。ある日、工藤君のクラスメートの1人が、コンテストに向けて朝練習をしようと提案し、クラス総出の練習が始まりました。す

ると、それを見た他のクラスでも同じように朝練習が始まったのです。私はその様子を例に、「1人が変わるとクラスが変わり、クラスが変わると学年、学校が変わる。君たちには社会を変える力があるんだ」と話しました。大切なのはアクションを起こすことだという私の言葉をずっと聞いてきたのが、工藤君たちタドチルなのです。彼らだからこそ、劇づくりにどうつながっていくかまだ分からない募金に、恥ずかしがらずに取り組むことが出来たのでしょう。

写真　田所クラス2年生のクラス発表「ALWAYS 2.3丁目の夕日」より

この年のステージ発表部門の最優秀賞となった田所クラス（2年3組）の作品。東日本大震災から日本はどのように復興していくのか、官庁や教育機関、国際機関にアンケートを行い、様々な意見を集め、劇のストーリーづくりに生かした。

自分が闘う姿を生徒に見せたかったのです

2年生の劇づくりでは、復興をテーマにいろいろな人に考えを聞いてみることを勧めはしましたが、それを劇のセリフに生かすことまでは私自身は考えていませんでした。あれはあくまで生徒たちのアイデアです。そこからどのように展開していくかは分からないけれど、とにかくやってみようという気持ちは、失敗を恐れない高望みと同じだと思います。

2年生の劇づくりで一番うれしかったのは、生徒が私の指示を待たずに、自分たちでどんどん動くようになったことです。

夏休み中、下校時間後も、学校近くの河川敷に集まって練習を続ける生徒を見て、私は彼らのために何かしたいと考え、劇の練習と勉強にクラスみんなで取り組む宿泊合宿を企画しました。しかし、私の計画が甘く、その企画を通すことは出来ませんでした。生徒に「この企画は必ず実現させる！」と宣言していた私は、何度も交渉しましたが、最後は諦めざるを得ない状況になり、私は生徒に「頑張ったけれど駄目だった。申し訳ない」と頭を下げたのです。

私は、良い劇をつくるために、生徒と一緒になって自分に出来ることをやろうとしている姿を、彼らに見せたかったのです。生徒に頭を下げた私は、再び学校と交渉して、校内でのクラス・バーベキュー大会を実現させ、クラスの一員として彼らとの時間を楽しみました。

人生を生き抜くためにはどんな力が必要なのかを、教師が生徒一人ひとりに教えることは難しいと思っています。私たちに出来ることは、生徒自身がそれに気付くチャンスをつくることです。だから教師は、世界とのかかわり方、高みを目指した闘い方を、自分の姿を通して見せていくべきだと思います。挑戦をすれば、生徒も教師も失敗することはあるでしょう。しかし、そんな時にも生徒にはクラスメートがいます。そして、私たち教師には同じ志の仲間がいます。だから私は、たとえ失敗しても、何も恥ずかしくないのです。